

2021年1月30日

2020年度聖路加国際大学大学院看護学研究科
課題研究

無痛分娩を希望している妊婦に対し助産師が行なっている
教育・支援の実態と助産師の意識

The investigation of fact at antenatal education and support for
decision-making midwives do for pregnant women choosing
epidural analgesia at birth

18-MW-002

榎田絢萌

要旨

《目的》本研究の目的は、無痛分娩を希望する妊婦と無痛分娩を希望するか迷っている妊婦に対し、助産師が行なっている教育・支援の実際を明らかにすること、さらに望まれる支援の方向性について明らかにすることであった。

《研究方法》本研究は、半構造的面接法を用いた質的記述的研究である。関東圏内にある4施設に所属する4名の助産師に対し、インタビューガイドを用いて半構造的面接を行った。分析には、Berelsonの内容分析法を用いて分析した。なお、本研究は、聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号：20-A040)。

《結果》分析の結果、129コードが抽出され、【無痛分娩に向けて心身を整える教育】、【意思決定のための情報提供】、【意思決定支援】、【情報提供の方法】、【助産師間で支援内容に差がある】、【無痛分娩に対する認識のギャップを埋める】、【分娩方法によらない一貫した価値観】という7カテゴリ、25サブカテゴリへ分類された。無痛分娩を希望する妊婦や希望するか迷っている妊婦に対し、助産師は、【分娩方法によらないケア提供への一貫した価値観】といった教育・支援における助産師の価値観に基づいて、【無痛分娩に向けた心身を整える教育】、【意思決定のための情報提供】、【意思決定支援】、【無痛分娩に対する認識のギャップを埋める】といった関わりを〈集団指導〉や〈個別指導〉といった形式で行っていることが明らかとなった。一方で、【助産師間で支援内容に差がある】といった現状の教育・支援における課題が明らかとなった。

《結論》助産師が行なっている教育・支援の実際と課題が明らかとなり、それぞれのカテゴリにおいて今後望まれる支援の可能性が考えられた。無痛分娩を希望する妊婦に対し共有意思決定による分娩方法の選択を支援すること、無痛分娩に向けて妊婦が体づくりの必要性を認識し、セルフケアを引き出す保健指導が重要である。また、これらの教育・支援を行う助産師の価値観として、いかなる分娩方法を妊婦が選択しても、中立的な立場で妊婦の選択を尊重する姿勢が大切であり、その重要性を助産師全体が認識することが教育・支援の差を埋める一助となると考えられる。